

能楽タイムズ

第788号



「三酔人夢中酔吟」野村四郎 山本東次郎 櫻間金記 (撮/吉越研)

新作能舞
「三酔人夢中酔吟」を観る

宗片 邦義

実に痛快な能舞であつた。いや、狂舞といふべきか。漢詩は俳句や英抒情詩などとはちがひ人生観を詠うものさうのことほ問外

漢ながら存じ上げた。しかし繰返される(配役資料にはなかつたようだが)三酔人の共術・人生観に快感を叫ばずにはおられなかつた。

た。見所は暗くて残念ながらメモが取れなかつたが、確かその言葉は、「詩とは花鳥風月を詠うものには非ず。真実を語るもの。真実は為政者が最も恐れるもの。それを作詩した故に左遷された」。

九月一日午後六時半、国立能楽堂は満席だった。新作能舞「三酔人夢中酔吟」李白・杜甫・白居易(改訂版公演)、知人が早めに切符を申し込んだ時点ですでにS席は売り切れだった。見逃された方の為にう少し説明申し上げると……。

李白・杜甫は盛唐の詩仙詩聖、白居易はその後の詩人だが、「夢中酔吟」、時空を超えて大いに酒を酌み交わし、狂言し舞い遊ぶ。三人とも世を糾すべく真実を語った故に左遷された。作者にして演出の笠井賢一氏によれば、「老女物にも『かろみ』を感じさせる四郎師の舞と謡いで李白の漢詩『月下独酌』を作品にしてみたいという思いが出発」であると、野村四郎師「自身とその著『狂言の家に生まれた能役者』(白水社)のなかで書いておられるこの李白という役は天衣無縫な大詩人で、無類の酒好き。狂言の飄逸さとからみが必要とされ、自分の中で能と狂言とが融合した大好きな役」と、正に打って付けの役。しかも、私は初見であるが、これが三度目というある専門家の感想は、今回が最も完成度高いと、笠井氏が目指す『言葉の力』を『声の力』によって受肉させ、増幅された『芸能の力』として観客に手渡すという行為、この舞台が二つの到達点であったとすれば、その達成を共に喜びたい。

一昨年、新作能「ロミオとジュリエット」公演後の打ち上げで、「僕はこれから野村ロミオに改名します」と宣言された四郎師が、

今度は「野村李白」に改名しますと宣言されてもよかつたほど、シテは(山本東次郎さんで、私はワキ(桜間)金記さんがその中間」と、当日のパティーでは誠に控え目であられたが。

しかし、傘寿を迎えられた野村・山本両人間両氏が、よく約一時間半、地謡(その長官詞を覚えられたものだと感心した。最後に三酔人が笑い飛ばして引き揚げたのも痛快だった。上演時間は八十九分。やや長すぎた。だが退屈はしなかつた。今回見所に外国人は殆ど見かけなかつたが、来年は、日中平和友好条約締結四十周年、大勢の中国人を招いて、『楊貴妃』三酔人(「石橋」をいすれも十分程度に短縮、日中解説入りで上演出来ないのか、などと愚考してしまつた。

(静岡大学名誉教授)

『能楽タイムズ』平成29(2017)年11月1日(第788号)記事より